

実施報告書

一足早く新元号「令和」ゆかりの地に行く

「歩け歩け福博の街速足二時間」特別コース

\$大宰府史跡ものがたり\$

日程：2019年3月29日（金）11時から12時40分

参加者（7人）：寄川、福嶋、高木、岩本、小西、悦ちゃん（小西さんの友人）、
行實

気温20度、薄曇りの天気です。都府楼跡の桜は6分から7分咲きくらいで
しょうか。グループや家族連れで、桜見物の人達が楽しそうです。我々は、桜、
菜の花、レンゲ草などの春の気配を満喫しながら、歩き続けます。四王寺山へ
の林道の裏道を通って、みかさの湯にたどり着きました。約1万歩、5.7km
の小旅行の完了です。

※行程：西鉄都府楼前⇒国分寺跡⇒太宰府市文化ふれあい館⇒坂本八幡宮⇒大
宰府政庁跡⇒戒壇院⇒観世音寺⇒歴史の散歩道⇒朝日地藏尊⇒白川橋⇒太宰
府天満宮駐車場⇒みかさの湯（ホテルグランティア太宰府）





筑前国分寺跡

ちくぜんこくぶんじあと
Tikuzen Kokubunji Temple Ruins

国分寺は、奈良時代の中頃、諸国に置かれた官寺で僧寺と尼寺があった。当時は天然痘の流行や内乱などの社会不安が続いたため、平安を願うべく、聖武天皇は諸国に国分二寺の建立を命じた。世に言う「天平十三年の詔」(741年)で、筑前国分寺は、大宰府政庁西北の見晴らしの良い丘陵上に建てられた。しかし、その創建についての記録は残っていない。ただ、西海道国分寺が天平勝宝8年(756)には建てられていた記録があるので、筑前国の国分寺もこの頃までは完成していたと考えられる。

創建当時の筑前国分寺は、約192m四方の寺域に金堂・七重塔・講堂などの建物が整然と配置されていたが、律令体制の衰退とともに国分寺の役割も失われていき、建物も荒廃していった。

発掘調査の結果、当時の講堂や塔・回廊の一部が確認され、その構造と規模が判明した。調査後は整備が施され、塔基壇や回廊の基礎部分が平面的に表示されている。

Kokubunji (temples and Kokubunji) monasteries were constructed in every province throughout Japan by the Emperor Shōmu's decree in 741 A.D. In the hope that Buddha would bring peace and social stability, Chikuzen Kokubunji was one of them.

The seven-storied pagoda is restored on a scale of 1/10 in Daishū City Forest Cultural Hall.

所在地 太宰府市国分4丁目13番1号ほか
指定名称 国指定史跡 筑前国分寺跡および国分瓦葺跡
指定日 大正11年10月12日

筑前国分寺跡創案配置

塔基の調査

復元された七重塔

どのような建物があったのか 筑前国分寺の建物は、講堂・金堂・中門が南北に直線的に配置される。特に金堂と中門は回廊で結ばれ、その内部に塔を配する。これは九州の国分寺によく見られる創案配置である。東大寺や東園の国分寺は塔が回廊の外に置かれる形式であり、これとは異なる。筑前国分寺のような創案配置は奈良時代以前の寺に多くみられる古い形式のものである。

発掘調査の結果から 1960年に発掘調査が開始され、現在も調査は続けられている。その結果、9世紀頃には塔と講堂が瓦葺基壇から瓦若葺基壇に改修されたことがわかった。また、10世紀には塔が、11世紀には講堂が焼絶していたようである。平安時代の終わり頃にはその役割を終え、その後は金堂のみが墓室的な建物として存続したと考えられる。

七重塔 天平十三年の詔によれば、国分寺の塔は七重で、その中には金の文字で書かれた金光明最勝王経一部が納められていたという。この塔跡の調査では、塔の心礎(中央の礎石)周辺に敷かれた礎石の下から環状に置かれた配石が確認された。これまでに朝がなにもないもので、その性格は不明である。祭事や法要にかかわるものなのかもしれない。現在、この塔の復元模型(10分の1)が、太宰府市文化ふれあい館の屋外に展示されている。

資料: 筑前国分寺保存会
創: 九州国立博物館設置促進財団助成事業
1997年11月設置



坂本八幡宮縁起

この坂本八幡宮は土地神・産土神として崇拝されている神社で、応神天皇を御祭神としています。

「圓満山四王寺縁起」によれば「嵯峨天皇弘仁二年（八一二）辛卯二月勅宣にて四王院に釈迦仁の像を造立し有智山寺の沙門鳳詮法師及行願具足の僧十一輩を移し開眼供養を遂げられ水田五十町を寄付し給ふ。鳳詮法師は坂本に住して善正寺と号す。又坂本坊と呼り。」とされ、平安時代にはこの坂本の地に四王寺の座主坊としての善正寺が成立していたとされています。

坂本にあつたこの寺は中世は天台宗の寺院で、本山の比叡山に習い九州の天台系寺院には境内に八幡宮を祭る形が多く見られます。当社の勧請時期は「福岡県神社誌」（一九四四年刊）の記述によれば「天文・弘治の頃」（一五三二〜一五五七）の戦国時代とされていますが、おそらくこの頃に寺院が廃れ土地を経営する現在の坂本区の原型となる村落ができ、その村の鎮守として寺の境内にあつた社が再興されたものと考えられます。

境内入り口南側にある「がらんま」と呼ばれる立石は天台寺院の故地によく見かけられ、寺の中心地や結界となる境に置かれる事があるようです。

この場所が大字の境で「辻」という小字であることも、当社の鎮守としての性格を現しています。

古代には大宰府や九州を守護する寺であつた四王寺が形を変えながら、現在では坂本区の鎮守として生き続けています。

新元号「令和」で一躍脚光！大伴旅人が「梅花の宴」を開いた邸宅跡とされる坂本八幡宮





